

令和 7 年 5 月 10 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2024

課題番号：20H01239・23K20083

研究課題名（和文）越境する文学の基本構造：日本各時代の唐詩受容の俯瞰的研究

研究課題名（英文）Clarify the basic structure of how literary works propagate overseas about Tang-shi

研究代表者

静永 健（Shizunaga, Takeshi）

九州大学・人文科学研究院・教授

研究者番号：90274406

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 9,500,000円

研究成果の概要（和文）：日本の伝統文化が形成される中で、中国の古典文学が果たした役割は大きい。しかし、その具体的な影響関係や歴史的な変遷については、これまで十分な考察は行われて来なかった。古代平安時代、中世鎌倉室町時代、近世江戸時代、そして近代の特に20世紀初頭の日本の学術界において、中国の古典文学の研究はどのように展開していったのか。これを具体的な唐詩の選集やその注釈書、また絵画や墨蹟資料を通じて考察していった。特に明代末期の盲目の詩人、唐汝詢の存在は、これまでほとんど研究されてこなかった未開拓な部分である。唐汝詢の著作『唐詩解』の発見は、今後の日本と中国の文学および文化研究において、重要な成果となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中国唐時代の詩歌は、同時代の奈良・平安時代より、日本の各時代において、さまざまなメディアを通じてもたらされてきた。しかしその中でも、江戸時代の『唐詩選』大流行の原因がこれまではいまいと明らかではなかったが、明末の上海で活動した一人の盲目の詩人唐汝詢の存在は、重要な発見の一つである。また、目が見えないという障害を持つ身でありながら、彼は周囲の暖かな支援を得て、また、彼自身の特性を活かして、唐詩の新解釈に挑んだ。古典文学の研究と、目が見えないなどの障害を持つ人々の研究とが共同することは、これまでほとんど無かったが、おそらくこの研究がその先駆けとなる重要な成果となるであろう。

研究成果の概要（英文）：The role of classical Chinese literature in the formation of Japan's traditional culture is significant. However, there has not been enough consideration given to the specific relationships and historical transitions involved. How has the study of classical Chinese literature developed in Japan from ancient times during the Heian period, through the medieval Kamakura and Muromachi periods, the early modern Edo period, and particularly in the early 20th century academic world? This question has been explored through specific selections and commentaries of Tang poetry, as well as paintings and ink works. Particularly noteworthy is the neglected area of research concerning the blind poet Tang Ruxun from the late Ming dynasty, which has been largely unexplored. The discovery of Tang Ruxun's work 'Tang Poetry Explained' will become a significant achievement in the future studies of literature and culture between Japan and China.

研究分野：中国文学

キーワード：唐詩 和漢朗詠集 長恨歌 唐詩選国字解 藤原公任 唐汝詢 服部南郭 目加田誠

### 1. 研究開始当初の背景

世界のあらゆる文化・芸術・スポーツは、おしなべて民族や地域そして性別や年齢差などを超越し、相互に理解し合い、相互にたのしむことができる。そして、文学もまた「言葉の壁」を越えて鑑賞し、感動を分かち合えることができる……というのは、すでに世界的にも共通して認識されている事柄であろう。今や、さまざまな国や地域の文学作品が、相互にそれぞれの言語に翻訳され、またそれぞれの新しい創作活動に刺激を与え合っている。また実際に人々の頻繁な往来にともなって世界は急速にその心理的・感覚的な距離を縮め、さらに「世界文学 (World Literature)」という考え方も、現在では当初の構想であった欧米諸国だけに限定されず、たとえば南半球のさまざまな国や地域・民族などをも含んで、いよいよ本格的な規模をそなえつつある状況にある。

だが一方、昨今の社会情勢として、世界各国の独自の文化・文学研究は盛んであるが、それらの研究が目指している方向性の中には、自国文化の優位性を強調し、ともすれば「自国ファースト」の言説に性急に同調しようとするものも往々にして見受けられる。中でも「漢字」という独特の表記システムを持つ中国の古典文学については、「国学研究」の名のもとに中国固有の伝統文化研究として、周辺諸国(つまり日本・朝鮮半島・東南アジア諸国)とは切り離して考察をすすめようとする研究も散見される。

中国の文学は特別だ、という根拠の薄弱で強引な研究を続けていては、本当の意味での世界文学は実現しない。しかし唯一この誤解を実証的に訂正し、欧米の文化・文学と、アジアの文化・文学とを繋いでゆけるのは、我が国日本の中国古典文学の研究者ではないだろうか、と気付いた。これがそもそもこの課題研究を立ち上げることとなったきっかけである。かつて 20 世紀初頭、欧米列強と清朝末期の中国との衝突(1900 年の義和団事件が最も象徴的)を反省し、当時の日本が世界に向けて積極的に果たした役割が、欧米の文化と中国や日本・朝鮮半島などの東洋文化との相互理解であった。すなわち東方文化研究所(北京・上海・東京・京都)の設立である。

私は先年、偶然にもその当時の貴重な資料である目加田誠『北平日記』(1933~1935 年)を見出し、これについて翻刻および注釈を発表した。今から約 1 世紀前の日本の中国学研究が目指していたもの、そしてその中で不幸にも 85 年前の世界戦争によって惜しいかな顧みられなくなってしまったもの、またいまだ実現に至っていないものなど、驚きの研究成果が少なからず見つかったのである。今回の課題研究では、この研究成果を基礎として、改めて中国の古典文学が日本に「越境」してきた状況を具体的に詳しく分析し、その異文化理解のありかたの基本構造を明らかにしたいと考えた。特に、その分析に最も好都合であるのが、日本の歴史において、すでに 1400 年以上の読書の実態がつかめ、かつさまざまな文献資料が残る「唐詩」であった。

### 2. 研究の目的

東洋の「漢字」を用いた文学作品、それらがいったいどのようにして創作・鑑賞され、やがてその近隣諸国である朝鮮半島や日本にもたらされたのか、その基本構造を分析・解明することがこの課題研究の目的である。そしてこの研究成果によって、「漢字」を用いた文学とは何であるのかを、異文化である欧米等諸外国の人々にもわかりやすく提示できる方法を模索し、またこれに隣接する問題として、漢字と仮名によって表記される日本文学の特長についても新たな解明のヒントを与えたいと思っている。

これはあたかも上述の「世界文学 (World Literature)」という考え方とは真逆のようにも見えるが、現在の世界文学が主に英語圏の翻訳(つまり欧米中心の偏ったグローバリズム)にあまりにも依存していることへの、一つのアンチテーゼでもある。

中国語、そしてそれにもとづく中国の文学は、一見、漢字という視覚を主としているように思われがちであるが、実は音声(文字の発音)こそが重要なポイントである。たとえばほとんどの漢字は「一つの文字」で「一つの概念(意味)」を示し、かつそれが必ず「一音節」で発音される。しかもその発音体系は、母音と子音との組み合わせだけでなく、それぞれに最大四つのアクセント(現代の北京標準語では四声という)の区別が必ず付属している。

この音声主体の言語であるからこそ、「唐詩」という中国古典文学を代表する文学ジャンルが生まれ、この故にこそ、古代中国において詩歌は常に最高ランクの文学作品だと認識されたのである。唐詩には、全ての文字(漢字)に「平仄」と呼ばれるアクセントの組み合わせが要求され、また一定の句末に「押韻」が求められる。この音の芸術である「唐詩」を、日本や朝鮮半島の人々はどのように向き合ったのか、ここに中国文学が海外に「越境」できる秘密が隠されている。

### 3. 研究の方法

日本人が「唐詩」に親しんできた歴史は古い。しかも、その実態を検証できる文献資料が、日本には幸いなことに幾つも豊富に、また各時代ごとに満遍なく残されている。

しかしこれまで日本における「唐詩」の受容研究は、翻訳、そして古代日本語による「訓読」

のみに重点が置かれ過ぎていた。今回私の課題研究では、この誤謬をまず是正したい。

平安時代、藤原公任（966～1041）撰『和漢朗詠集』について、その収録漢詩句すべての「平仄」式の調査を行った。『和漢朗詠集』には、周知の通り中国と日本それぞれの漢詩（一部に散文の隻句も含む）の名作が選び取られているが、その「平仄」式が論文等で明らかにされたことは、これまでほとんど無かった。

次に江戸時代、日本では明の李攀龍（1514～1570）が編集したとされる『唐詩選』が大流行した。やはりこの背景にも、中国の文学を「訓読」ではなく「音読」で理解しようと主張した荻生徂徠（1666～1728）ら古文辞派知識人たちの提唱が大きく作用している。今回の課題研究での具体的な検証としては、徂徠たちが間違いなく読んだと思われる明末の知識人唐汝詢（1565～1659）撰『唐詩解』の研究を中心に行うことにした。

近代では、前回の課題研究に引き続いて目加田誠（1904～1994）の書き残した1930年代のノート・旅行日記・手紙類の整理とその翻刻、注釈を行った。これまで十分には知られていなかった日中戦争以前の日本と中国との真摯な学术交流の実情がさまざまに明らかとなった。

#### 4. 研究成果

平安時代の『和漢朗詠集』編纂の時代、日本の知識人たちは中国語の「平仄」にいったいどの程度習熟していたのだろうか。その検証として提出した研究成果が、2022年の「音読和漢朗詠集漢詩句初稿（巻上、春）」、2023年の「音読和漢朗詠集漢詩句初稿（巻上、夏）」、そして2024年の「音読和漢朗詠集漢詩句初稿（巻上、秋～冬）」である。静永を首班として、その年度に九州大学大学院に在学していた大学院生にも入力を援助してもらった。日本において『和漢朗詠集』の研究は、日本文学や書道芸術の方面で数多くの成果が出されてきたが、音声（朗読）の方面に関しては、青柳隆志『日本朗詠史』（1999年）以後ほとんど研究が手つかずのままであった。中でも、私が今回手がけた「平仄」の調査研究は、まず誰も考えつく基礎的な作業であるように思われるが、これまで全く行われて来なかった。従来日本の中国文学研究（漢文学研究）が、いかに外国語（中国語）としての認識を欠いたまま行われて来たかを深く反省した。ちなみに、平安日本の知識人たちが「日常会話レベルでどこまで中国語が話せたか」は不明であるが、その漢字音については、そのアクセントについても同時代の中国の知識人と同等のレベルまで理解していたことがわかった。

江戸時代の『唐詩選』流行に先駆けては、その参考書となった明末の文人唐汝詢の『唐詩解』を考察の対象とした。実はこの唐汝詢は中国の上海に生まれ育ち、しかも生家が地域の塾を経営していたこともあって、四書五経から二十二正史、諸子百家、そして唐詩のみならず水滸伝や三国志演義までにおよぶ膨大な書物を読むことが可能であった。しかし不幸にも五歳で両眼を失明した彼は、そこで突如「将来は科挙を受験して官僚士大夫になる夢」を絶たれてしまった。だがその後も音読によって読書を完遂し、長じてはその塾で少年たちに書物の句読を教えるかたわら、唐詩を愛読して、その解釈を口述した。その講義録を書き取ったものがこの『唐詩解』五十巻であるが、全盲であることが信じられないほどに詳細な注釈がびっしりと綴られている。この書物はその150年後の清朝『四庫全書総目提要』において「欠落の多い粗雑な注釈書だ」と酷評されてしまったために、これまで学界ではほとんど顧みられることの無かった書物である。しかし、本書の注釈は上海の市井の子供達の前で語られたこともあり、その詩歌の解釈は懇切丁寧である。また、私はこの唐汝詢の注釈を参考にして、日本の江戸時代の服部南郭『唐詩選国字解』（唐詩選をはじめ和文で解釈した書籍）が出来たことを突き止めた。江戸の庶民に好まれた注釈の原本は、やはり中国上海でも一般庶民向けに口述された書物だったのである。なお、この方面の研究成果として、2021年の「唐詩の微韻」、2022年の「明末の異人唐汝詢とその唐詩注釈」、2024年の「白居易「旧枕故衾誰与共」句の伝播と消滅」、同じく2024年の「モニタージュされた美女：「長恨歌」楊貴妃論」を発表している。また、目の見えない人がどのように唐詩を理解したかという問題は、今後私が引き続き取り組むべき新しい研究課題だと認識している。400年前の中国の知識人が、音読によって、いったいどのくらいの量の書籍を読み（彼の既読書828点のリストが残っている）、唐詩を解読できるようになったのか、新たな考察に取り組みたいと思っている。

近代の目加田誠と東方文化研究院との関係については、九州大学専門研究員稲森雅子氏の協力を得て、こちらも新たな資料の発見が相次いだ。研究成果には2020年から2023年の「目加田誠『北京旅行日記（一九三六年）』翻刻注」（一～三）、2024年から2025年3月刊行の「目加田誠『中国旅行日記（一九四二年）』翻刻注」（上・中のみ、下は今後公開予定）がある。

以上を要するに、日本の伝統文化の形成に古代中国の文化・文学作品が大きな影響を与えたことは十分に認められることだとしても、それは、そもそも川の水が上流から下流へと下るような自然現象のような安易な作用ではなく、各時代の幾人かの先見的な知識人による地道な努力、そして独自の取捨選択によって実現されたものであることが明らかとなった。そして、近年の研究者があまり注目して来なかった点として、中国文学が「音声」を中心に伝達される文学であること、そしてそれを享受した日本の知識人もまた中国語の音読に対して、十分な理解力を持っていたことは、今後もさまざまな機会を通じて力説してゆきたいと思っている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 10件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 11件）

1. 著者名 静永 健	4. 巻 147
2. 論文標題 白居易「舊枕故衾誰與共」句の傳播と消滅	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 東方学	6. 最初と最後の頁 59-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 静永健、汪洋、陳イセン、張茜、樊致遠、李岳陽、遇イ揚	4. 巻 52
2. 論文標題 音読和漢朗詠集漢詩句初稿（巻上、夏）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中国文学論集	6. 最初と最後の頁 159-165
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 静永 健	4. 巻 52
2. 論文標題 『目加田誠「北平日記」』補注一則（其二）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中国文学論集	6. 最初と最後の頁 166-166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 静永健、稲森雅子	4. 巻 121
2. 論文標題 目加田誠『中国旅行日記（1942年）』翻刻注（上）	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 文学研究	6. 最初と最後の頁 1-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 静永 健	4. 巻 66
2. 論文標題 路(みち)が熟するとき	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 TONGXUE	6. 最初と最後の頁 12-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 静永健、汪洋、陳イセン、張茜、樊致遠、李岳陽	4. 巻 51
2. 論文標題 音読和漢朗詠集漢詩句初稿(巻上、春)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中国文学論集	6. 最初と最後の頁 130-149
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 静永健	4. 巻 95
2. 論文標題 明末の異人唐汝詢とその唐詩註釈	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中国文学報	6. 最初と最後の頁 32-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 静永健、稲森雅子	4. 巻 120
2. 論文標題 目加田誠『北京旅行日記(1936年)』翻刻注(終) 11月21日~12月24日、付楠本正継宛書簡・書齋対聯	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 文学研究	6. 最初と最後の頁 1-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 静永 健	4. 巻 50
2. 論文標題 唐詩の微韻	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中国文学論集	6. 最初と最後の頁 41-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 静永 健	4. 巻 1
2. 論文標題 日本人は本が好き	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大野城心のふるさと館開館3周年記念特別展「国宝翰苑の世界」図録	6. 最初と最後の頁 60-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 静永 健	4. 巻 8
2. 論文標題 大学一年生に「漢文」を教えることについて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 基幹教育紀要 (九州大学基幹教育院)	6. 最初と最後の頁 111-122
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 静永 健・稲森雅子	4. 巻 119
2. 論文標題 目加田誠『北京旅行日記 (1936年)』翻刻注 (二) 11月2~20日	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 文学研究	6. 最初と最後の頁 1-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 6件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 静永 健
2. 発表標題 舊枕故衾誰與共 本文の伝播と消滅
3. 学会等名 九州大学中国文学会（第324回中国文芸座談会）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 静永 健
2. 発表標題 「旧き枕故き衾誰とともにか」本文の伝播と消滅
3. 学会等名 東方学会（第67回国際東方学会議）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 静永 健
2. 発表標題 白髪三千丈は何メートル？ 漢詩の読み方の基礎講座
3. 学会等名 大野城心のふるさと館中国文学講演会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 静永健
2. 発表標題 盲目の注釈家唐汝詢とその唐詩選集
3. 学会等名 朝日カルチャーセンター・九州大学文学部提携講座（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 静永健
2. 発表標題 博多の津と中国文化 金印から最後の遣唐使まで
3. 学会等名 大野城心のふるさと館中国文学講演会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 静永健
2. 発表標題 唐汝詢と日本
3. 学会等名 第321回中国文芸座談会（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 静永 健
2. 発表標題 唐詩の微韻について
3. 学会等名 九州大学中国文藝座談会（第314回）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 静永 健
2. 発表標題 日本人は本が好き
3. 学会等名 大野城心のふるさと館特別展「国宝翰苑の世界」関連古典文学講演会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 静永 健
2. 発表標題 水をたのしみ、山をたのしむ：中国古典の世界
3. 学会等名 大野城心のふるさと館中国古典文学講演会（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 静永健	4. 発行年 2022年
2. 出版社 鳳凰出版社（中国）	5. 総ページ数 337
3. 書名 目加田誠北平日記	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	稲森 雅子  (Inamori Masako)		
研究協力者	杜 曉勤  (Du Xiaoqin)		
研究協力者	查 屏球  (Zha Pingqiu)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	周 裕カイ  (Zhou yukai)		
研究協力者	謝 思韋  (Xie Siwei)		
研究協力者	林 嵩  (Lin Song)		
研究協力者	張 伯偉  (Zhang Bowei)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
	北京大学	清華大学	復旦大学	他3機関
中国				
その他の国・地域（中華民国・台湾）	台湾大学			